
毎歳祭

八百万 百合

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毎歳祭

【Zコード】

N1773X

【作者名】

八百万 百合

【あらすじ】

毎年行われる祭りにある変化が起きてしまった…、その鍵を握るミリとその鍵を追うマチによるハチャメチャなどこうに百合百合んでおくるストーリー

プロローグ 前夜祭

私はミリ

ミリ・レンチャヤ！

夢見る15歳！

そう…

あの日が来るまでは…

（毎歳前夜祭）

カラソロロン…

カラソロロン

「明日は祭りだね」

「違う

マチの誕生日会

忘れていた…

マチの誕生日会やひつて私言つてたんだ！

「…」めん

マチ！

「嫌

完全に嫌われた…

どうしよう…

…！

「……マ～チツー！」

「冷たつ…

何すんのー…」

マチの手こなす

マチの好きなラムネが握られていた…

「…覚えてる?

あのとき飲んだラムネの味?」

「……うん…」

いつしか右手を占領していたラムネは
マチの右手に…

そしてマチの右手を占領してこるのは
マチの左手へ…

プロローグ前夜祭（後書き）

見ててくれてありがとうございます..
次回も見てね♪

「**私**ミリ！

「...・ランサム...」

一 好きな食べ物はご飯！

当たる前よれ！

田方ハナキア

卷之三

「網狀網」：二十一世紀的社會組織

四百二十九

「ミリ…大きいよ…」

あつ！ボク、マチ。

「アーバン・マサ・ダニエル」

一 好きな食べ物は食パン。

ふんわりとしたあの食感…ああ

「意語た升んじた。」

卷之三

本重は無通。

「胸があるにさうな。

15

赤面しながら言つ

「マチつて小さいね」

「やけながら//ココマチの胸を触る

「あつ……こつ……

「ひ、ひ、

「マチはもつ//ココの手に遊ばれてる

「それ……それ~!~

「ハアハアハア

「マチ……可愛い……

息づかいが荒くなる//コ

「ああん……//コ…

今回は……こ、こつもよつ……激つ……こよ…

はあはあ……はあはあ……

マチも息づかいが荒くなる

「キス……しちゃう~、

「つ……うん

ちゅ

くちゅくちゅ

「//コの舌……温かい……」

くちゅくちゅ

「マチの舌……だつて……温かくて……柔らかい……」

めちゅめちゅくちゅくちゅめちゅ

舌と舌が離れるとき

半透明な液の糸が引かれた……

「気持ち……良かつたよ……マチ……

ハア……ハア……」

「ボ……ボクも……気持ち……良かつた……

はあ……はあ……」

「ココとマチは両想いのなのである……

キャラ紹介
ストーリー

始

終

半話 キャラ紹介（後書き）

今回はキャラ紹介をしました
その中に百合を入れてみました
次回もよろしくお願ひします！！

1話 これはただの始まりに過ぎない（前書き）

秋の夕暮れは長し、
春の夕暮れは長し、
どちらも自分で変えられる。

1話 これはただの始まりで過ぎない

（教室）

「はあ……」

「どうしたの、//こ?」

ため息をついた//こに優しく声をかけるマーク（この友達であつ、
親友）。

「最近、気になる子がいてや～」

廊下側に田をやる//リ

「えつ、どこどい～」

興味津々を探すマーク

「…もしかして…あの子?」

「……／＼／＼／＼」

頬を赤らめる//コ

「ふつふつふ～」

「?」

「ひひよひひよひひよ～…」

「…くつ…くくつ…」

必死に笑顔をこらえる//コだが…

「見えた！必殺！…脇…！」

「へつくちょん…！」

「…何！？避けただと」

見事、くしゃみにより必殺脇を避けた

「…誰かが私の噂をしているな

「ないな」

「…えつ…？」

即答だった。

1秒もない速さで返事が返ってきた。

しかも真顔で

「噂つて…ミリみたいなバカを噂するバカはいないよ～」

「ひどい…！マーレひどいよ～」

「はつはつは～…隙あり…！」

「うつ…！」

マーレの人差し指が見事に決まった

そう、私ミリ。

一目惚れしてしまった女の子。

これから起ることとは全て現実で起る非現実。

私は何も知らない

何も思ってない

1話 これはただの始まりで過ぎない（後書き）

だいぶ遅くなりました、
今は自由な時間が少ないからね
次話も遅くなりそうです

2話 一曰二十四時間--- (前書き)

必須

合・レズ・Gに慣れてない人は決して読まないこと---!.

(表現のみ変更しました)

その気持ちはなに?
どうやうの?

ミリの朝

寒い

今田、4月9日（月）だね
もちろん学校がありますね

8時20分 余裕あるーと、フルート

学校が始まる時刻は8時30分だね
もちろん余裕ありませんよ

カチヤ

バタン

「…違ひ、セイサウーメン壁だよ、うちの木工ボンデ専門店で
しょ」

……なにいつてるんでしよう

寝言でしょうね

意味が分かりませんね

木工用ボンド専門店つて…

「…はつ…夢か…危うく騙されるとこひだつた…一つ一円の紙（〇・〇一?）を買つてこひだつた」

寝言と全く関係ねえ…!

本当にコイツで大丈夫なのか?

私は絶対騙されないぞ!

「…? 8時29分… 蹄めちやお」

コイツ諦めた

どうすんの?

帰らねえか?

帰りてえ!

「…ぐう」

寝た!!

寝るの早い!!

本当にコイツなのか?不安になつてきました…

私も
俺も…

「…行つてきまーす」

…え。

コイツ…本物だ!

良かつた…間違いない

学校

「……まあまあまあやつとひいた

コイツって運動神経いいのか？

マニー

ガラガラガラ

• ፳፻፲፭/፻፻፲፭-፻፻፲፭

「あ、ミツ、遅いぞ~」

ガラガラガラ

「ミリつてば寝てばっかりだな」

11

「はい」

よし…本当に「トイツだな
そうだな…トイツに監視を続けるよつと言わねばな…

トイートイートイー ガチツ

マチ、マチ・マトバ、こちら 〇一、フイリア・キコだ、続けてミリ、ミリ・レンチャを監視しろ

「分かりました、フイリア・キコ、必ずしも鍵をとつて参ります。」

期待しているぞ、マチ・マトバよ

プツン……

「はあ……、疲れた、早く寝にならなかな」

「……だいたい君たちは何しに学校に来てるのかね？（一ココ）

「「遊びと睡眠学習でーす」」

「……お前らなあ、遊びも良じけど……睡眠学習はびつなんだー！」

「いいと思いまーす」

「私もミツにわんせーー」

「……もういい、席へ戻れ」

「「はーー」」

くくく……今回も先生を負かしたぞ

ガラガラガラ……ピシャン！

「……はあ～

大きくなため息をつく先生であった

「寝休み

「ふああ～、お腹だーー長かった…」

「//こいつはほとんどの寝たの//」

「こやこや寝てなによ～、睡眠学者…」

わやかな笑顔とともに

「ふつ、//こいつは～」

「ソソソソシ

「はい、ティッシュ」

マーレのカバンからポケットティッシュが出てきた

「あ、ありがとうございます」

よだれをふく//

そして机の隅へ置く

「ちよつと一ちゃんとすぐ//箱に捨てなさよーまつたく…
ひょこと机の隅におこてあつた使用済みのティッシュを貰つて//
マチ

「~~~~~

通り過ぎて行くマチを見て、顔が赤くなる//

「おやおや～、もしかして、恋ですか？」

「冗談半分にマーレ

「…………うん……絶対そう……」

どちらもなく真面目な顔でいふ

「……マジか…、応援してるよー!!」「こ

「八八八八八……」

軽い笑しがクラスに響く

一方、マチは…女子トイレにいた…

「ハア…ハア…ミリの…よだれ付きティッシュ…」
美化委員であるマチは、その立場を利用したのである

「……ハア……ハア……何か……あそこが……熱くなつてきた……」

「…ちょっとだけなら…いいよね？」

マチは上着を脱いだ

「三つのおだれを…ホケの口…」

「生温かによ...」

マチは舌にのつた少量のミツのよだれを飲んだ

「...熱くなつてゐたよ...」(二)

身体全体が火照つてきた

「……ひやんー？……もひ……//こつてば強引何だから
よだれ付きのティッシュをマチの乳首へもつてこぐ

「でも……悪くないよ……気持ちいい」

今度はもひ方の乳首を左手でいじり始めた

「……あー！あそこから汁が出てきちゃった……」
パンツにはもう滲んでいた

「もひ……脱いじゃえ」

脱いだパンツにはネバネバの半透明な汁がついていた

「え……//こ……ソロはダメえ！……あひ……んひ」

右手にむりていた、//このよだれ付きティッシュをあそこにもつて
いき、擦る

「//このよだれが……ボクのあそこ……ボク……何か……変な気分になつ
てきたよ……ハア……ハア……」

擦り方が激しくなる

「//このボク……もうイキそうだ……」

少しティッシュと共に指を入れてみる

「ああ……いく……あああああああん！……あんつ……あ
そこから汁が溢れ出る、ネバネバとした半透明な汁が……」

「……気持ち……良かつたよ……//こ……」

溢れ出た半透明な汁は上着やら制服にかかっていた……

その頃……//こたちは……

「あつ……私、お手洗い行つてぐるね、//この階は美化委員が掃除してて、立ち入り禁止だから……下の階行つてぐるね」

「じゃあまたあとでね~、マーレ~」

手をふる//こたち

「……マチの、手汗だ……//」

どうしようか心の中では迷つていたが、身体ではもう動いていた

ペロッ

「……少しショッぱい……//」

顔がすぐ赤くなつた

そして火照つた

「やつぱり私…恋してるんだ…」

これまでにない感情にそつ思つのであつた

~夜~

「…………」

なにも考えずて寝る//こたつであった……

「今日は良い」とあつた~、明日も良いと起つたといつた

今日起つたことを脳内再生しながら寝るマチであった……

明日、あんな事が起つたとは誰一人知らず……

ただ一人を除いては
……

2話 一月一十四時間…（後書き）

今回は長くなりました！

一日で出来てしましました…

なので次回は投稿まで長くなるでしょう…

あと

12時か0時に投稿するときは出します

これからは…！

3話 現実は非現実に（前書き）

その現実は…
何回目だ？

3話 現実は非現実に

チコノチコノ…

「…よく寝た～、…ん…?」

窓から外を見るといつ漆黒が窓を染めていた

「…今何時～?」

時計が毛糸になっていた

「…だじゅれか!…うと、つこしき「」をつかひた…」

階段を下り、一階のリビングへ行つてみよひとある

ミハシ ミハシ ミシ

ミハシシと音がやけに響きわたる

「お母ー やーん!」

「何だー? 騒がしい

流石お母さん、即答

「お母さん、今何時?」

「7時37分36秒」

流石お母さん、名は知られていないけど、体内時計が産まれてから
ずっと、一寸の狂いもない

時計を見ずに今の時間を正確にいえる特技は伊達じゃなかった

「ありがとうございます、お母さん……でも、なんでこんなに外、暗いの？」

ピッ

『 こちらブグの時計塔に来ています、ブグの時計塔は、建築からずつと、523年も狂いがなく、世界文化遺産として登録されていますが、ご覧ください！』、時計が逆方向に回っています！しかも歯車はなく、軸だけで支えられているということです！こんなことは有り得ません！このように世界中で有り得ない事が起きています！皆さん、なにが起こるかわかりませんので十分注意をしてください！』 以上、ブグからの中継でした。』

ブツン

「分かったら、ミコ」

「UJのテレビも壊れてるの？」

「壊れてない、今は

「…え、今は？」

「そう、今は」

沈黙に包まれる

「ミコ、学校は？」

「あ……忘れてた」

慌てて学校のバッグを持ってきて、教科書を詰め始めた

「ミコ、『ご飯と味噌汁をおいて置くぞ』」

どんぶりに入った『ご飯と味噌汁が机の上に置かれた

「分かった」

教科書いっぱいのバッグを両肩にかけて、『ご飯と味噌汁を食べ始めた

「ああ～、やつぱり米だよね～」

頬いっぱいに『ご飯を詰め込むミコ

「私は仕事に行つてくるが、ミコも学校に行けよ

「あ、お母さん、お父さんは？」

「あ～、あいつは一昨日から『いか行つたぞ』

「ふ～ん

続けて『ご飯と味噌汁を食べ始めた

「じゃあ行つてくる

「行つてらつしゃい～」

ガチャ ガチャン

「さあ、私もそろそろ学校行かないとな

～学校周辺～

ザワ…ザワザワ…ザワ…

「学校の屋上見て見ろよ」

「え…、あいつはいつのクラスじゃね

「あいつは句がしたいんだ、黒いマントなんか着て」

「いろんな生徒の声が聞こえてくるなか、聞き覚えのある声がした

「…お、//コ～、//りんとうは大丈夫だつたか？」

マーレだ

「ん、別に時計が毛糸になつていた位だよ～

「…//りんとうは大丈夫そだな…」

悲しそうな、でも、嬉しそうな表情を浮かべる

「え…、マーレんとうは大丈夫じゃなかつたの？」

「うさ…ちゅうとね…、いつも行く道が並んでたんだよ…」

「あ…その、大丈夫だった?マーレ」

「何とかね…、あ、家も並んでたよ、私の家は何とか大丈夫だったからよかつたけど」

「良かつた~、マーレが無事で…」

「ふ~、//こは大袈裟だな~」

「ミリが真面目に言つたにも関わらず、笑つてしまつたマーレ

「もう~!酷こよマーレ~せつかく私が心配してたの~

の//うみをマーレは優しく撫でる

なでなでなで

「ふ~…や~…」

「可愛いな~//こ、でも、私を心配してくれてありがと

「は、恥ずかしいな~//こ

その言葉に顔を赤らめる//こ

「あ、やつこえせー!!」、学校の屋上にいるのって、マチじゃない?」

「え? ……あ、本当だ」

皿をいじらせてみるとやはり本町にマチがいた

バザバサ…バザ…

「本当? ……なつたんだな…」

屋上からマチが見上げて見ると、やはり、漆黒な空に佇んだ町々が広がっていた

「あ～あ、見窄らしげ町になつちやつたあ～よ」

マチの後ろにいたサク・サレが突然そんなことを囁つた

「雑魚の分際でボクに許可なく喋んなー! サクーー!」

「あ…、申し訳ありませんマチ様、余りにも見窄らしかったのでつい…」

「だ・か・ら、喋んなと言つてんだよーー! サクーー!」

「も、申し訳あつませんーー!」

土下座をするサク

「チツ…、こんな事になるんだつたら…、くそーー!」

バギヤ……ベシッ…ボロ

強く右拳を床に叩きつけると人が2、3人入るくらいの穴があいた

「ここの世界中の人口は何人だ？サク」

急にサクに世界中の人口を聞くマチ

「あ……えあ……あ、その……あ……」

急に聞かれたので、とりあえず土下座から通常に戻して、調べようとするサクだが……

「おーっそい！お前のような雑魚でカスでも情報収集は晩飯前だろ！……このボクを待たせるな！」

ビヤコン！！

右足で床を叩き始めた

「ひい……えっと、世界中の人口は89億5842万639人……いま、89億5842万640人になりました」

異常な早さで世界中の人口を言った、さらに増えたことも言ったサク

「44億7921万320人か……全く持つて少ない……」

「え……、いきなりどうしたんスか？」

「あ……、破壊計算だ」

「…? 何スか、それ…」

首を傾げるサク

「今の地球を破壊、すなわち壊すと、どれだけ地球回復ができるか
という計算だ、サク、覚えとけ!」

「でも…その計算式はどんなんのですか?」

またしても首を傾げるサク

「んなもん簡単だサク、世界中の人口÷2だ」

「えつと…その半分の人間はどうなるんスか?」

またまた首を傾げるサク

「はつ? そんなもん決まってる、現実から跡形もなく消えてなくなる、そいつがいた存在さえも…」

さらに話をつづけるマチ

「つこでに説明しておぐぞ、この歪みは通常と五分五分なんだ、も
しこの地球が壊れたとする、すると地球はなくなる、だが歪みが逆
回転をし、地球は戻る、だが歪みは五分だ、歪みが戻るさい、五分
五分の五分がなくなるということになり、人が五分消されるんだ、
でもそのかわりに歪みは少なくなるんだ」

長々と説明をしたマチはサクを見た

「全て記憶させていただきました

「よし、でもあと一つ方法があるんだよ……」

マチは頷き、座った

「え、教えてください……！」

土下座で頼むサクを見たマチはいつの間にか

「それは……鍵だ！！」

3話 現実は非現実に（後書き）

だいぶ遅くなりました

次話も遅くなりそうです

それと感想お待ちしております

ではまた次話出会いましょう

4話　違う視点から　（前書き）

そこには…
違う見方があった

4話 違つ視点か

「な、なにやつてるんだろねーーー」

屋上にいたマチをみて、顔が少し赤く染まった

「お、顔が赤いぞー!!コー

ほつぺたを触りながらココをこじへる

「も、もうやめてーーー!」

「やめないよー、だつて笑つてるもん」

「これは笑つてないよー、怒つてるんだよーーー!」

だが、とても怒つてるとほ見えない

「あはは…、可愛い…」

何故かマーレの息が荒くなる

「…マーレ、息、荒くなつてるよ?」

「…え?」

さうに顔が赤くなる

「…だつて好きなんだもん…」

ボソッといづつ

「…? 何か言つた?」

「こせ…向も言つてなこみ、ただ可憐になつて黙つて

「マーレも可憐こよ」

「……せ、恥ずかし…」

「こひ言わると向故か顔が熱くなる

これつてやつぱつ「恋」?

でも//つせマチに恋してゐし…私の恋は実らなこだらつたな…

「……」

マーレの皿から知らぬまに涙が溢れ圧ひへる

「……え、どうしたの…?」

マーレが涙してゐることでも心配する//こ

「……どうしたんだが、私

制服で拭つ、だが涙は止まらない

「…」

「はい、ハンカチ、これで涙、拭いて」

「//このかばんからぐしゃぐしゃのハンカチが出てきた

「あ、ありがと」

涙をそのハンカチで拭く、すると鼻血がタラリと出た

「あ、鼻血…でてるよ」

「え…、じつじよつ…」

鼻血が出た」とこあたふたするマーレを見て、その隣で//は言つた

「そのハンカチあげるよ」

驚くべき言葉だった…、あの//、物を絶対あげない//にして、この学校でとても有名なのに…、その//の口から「あげるよ」といつ言葉がでるとは

「……」

その驚きに口をポカーンと開けるマーレ、//はい//…

「だつて私ら、親友だろ」

「//とほほえみながら言つた

「親友」…か、やっぱり私らは親友どまりで、「恋人」はいかないんだ…、仕方ないよね、女の子同士だもんね、でもこの恋は突き通

すよ、例え片思いでも、例え叶わなくても、「大好き」って言つた
い…

「…？どうしたの？…あ、鼻血止まつてる」

いつのまにか鼻血は止まり、涙も止まつた

「…！…よかつた～、鼻血止まつて…」

「あ、そうだ～ついでだからそのハンカチあげるよ」

「え…本当？本当なの？」

「あげる」と机に向かって一度も間まつと

「本当に、本当にだよ」

て、答えが返つてきた、なので私は

「あつがとう」

そつ、感謝の気持ちを言葉にあらわした、そして、彼女の胸を揉んだ

「ひやん…もづ～～」

彼女は怒つてゐる、私は揉むのを止めた、今度は、彼女の制服の中に手を突つ込み、生で胸を揉み始めた

「あやつ…やめて～～～」

彼女の裏声がでてきた、その声に反応して私はさらに揉んだ

「VVVV...」

『やめてあげて！！』

11

マーレの手が止まつた、見知らぬ女の声がしたからである

「誰だ！」

私?

マーレの問い合わせに対し、見知らぬ女の声の答えが返ってきた

「そうだ！」

「アーリーの魔術は、アーリーの魔術だ？」

不自然に思つたミリかはなしがけてくる

……リセ……麗しえなしの？幼い、幼女の麗

『私は幼女じやない！』

すかさず否定する幼女（？）の声

「あ、やつやつ、」の声

「…へ、何も聞こえないけど？私が聞こえるのは、君のやがわつかだけだ
けど…」

首を傾げ、マリコは聞く

「え…本当に…？」

「うん…本当に」

マークの間に、対して真面目に答えるマリコ

「マジか…」

『あ～、言こ忘れてたけど、私の声はマーク、あんたにしか聞こえ
ないわよ』

「…え？そんなこと出来るわけないだろー。」

マリコの胸を揉みながら笑うマーク

『じゃあ、試して…マークはマリコのことが大好きですーーー。』

大声で言った

「うわ…何言つてんのやーーー。」

キラキラと笑つを見渡し、マリコを見る

「…？」ビックリしたの、マー、こきなり大声だして

「あへ、ナンテモナイヨ、ミコ」

ミツカヒリ皿をせりして、何でもなこと言い放った

にしても何で？私はミリが大好きって事、わかつたんだ？

『ふふふ～ 心の声もまるまる聞こえてるよ～』

「…うよつーー！」

『あんまつ声にだして言わない方がいいよ～』

「…分かつた」

と口を開じた

『じゃあ…、心の声ではなして『らん』

なんで心の声が聞こえるの？？とかなんで私しか聞こえないの？？

『…やっぱり来たか、その質問…、では答えてあげよう！…その答え
は…』

その答えは…？

『その答えは…』

わわわと…！…幼女！

『……まいはい……、それはあなたの脳に直接話しかけているからだよ』

『そんな』と出来るのか？

『何故か出来るんだよ……私は』

つてかなんで私に話しかけたんだ？

『いや、それは……あんたのことが気に入ったからだよ』

わ……私の事が気に入った……なななな、なぜ／／／

『それは……あんたのことが好きだから……』

は……／＼／＼わ……私には／＼／＼しかいない！幼女に恋心抱かれても……好きになるわけないじやない！／＼／

『それでもいい……片思いでもいい……でも！好きで！させで……』

しょ……しょうがないわね……／＼／

『やつた～！ありがと！マーレ、そして好きだよ』

な……なんか好きって言わると悶れるな／＼／

『お互い様だマーレ、それじゃあマーレの脳と契約を結ぶから少し待つてね』

あ、ああ……つて契約！？

『よしつ成立す、これから宣じぬマーレ』

……しようがないか……ああ、宣しくな、幼女

『だからら、私は幼女じゃない!』

ならなんて呼べばいいんだよ!』

『……ん~もうね、トペ・サイプリッジでいいわ』

……え~と、トペー!これから宣しくね

『うん 宣しくねマーレ、ではまた呼びたいとせり呼んでね つ、ついでに心の声で呼んでね』

……あ、ああ分かったわ

「…………ふう」

「マーレどうしたの? 長時間黙言だ」

「……されは……ミコの胸をじつ搔もつか考えていたからわあ……!」

上級ドライバー並の速さのじつをミコの胸をせりて搔み始めた

「ひやん……」

ミコの顔が火照つてあつたかくなる

「ああ～三つの胸柔らかくてあたたかい」

「もう… しょうがないわね…!」

よつせへ//の胸から手が離された

「ふう……マーレンてば女の子見るとすぐ胸揉むんだから」

「だ、だつて、柔らかくてあたたかいんだよ！そりやあもう、揉むしかないっしょ」

キララとした目でミツを見つめる

「マーティは素直だな～」

「……私は素直なんかじやない！」

「……な、そ、そんないことないよ、だって……む、胸に情熱がこもつてるし……私なんて……」

「……もうーーそんな暗く考えちゃダメだよー！ そんなの!! こりしくないーーそんなニコ……好きじゃないーー！」

「え、あ、その、あ…」

思ひこころひむきの言葉にうつせば、我心でもなこまつ

「だ・か・ら、そんないつは好きじゃなーーーありのままのいつが

好き！いや……だ、大好き……ミワー！／＼／＼

あまりの恥ずかしさに顔が沸騰しそうなくらい熱くなつた

「……え

4話　違う視点から（後書き）

さて、どうなるのか！？

続^きは次^話で！！

お楽しみにね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1773x/>

毎歳祭

2011年11月24日12時49分発行